この素晴らしい異世界でチートらしいチートを貰わずに微妙なチートで神様転生して無双するテニスプレイヤーとかいう謎の職業に就いた勇者も魔王も超越する常識を置き去りにした強すぎる超次元スポーツ男に祝福を！？

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「異世界か・・・・・・世界どころか、全国よりもヌルそうだな」

超高校級のテニスプレイヤー、鏡見　武蔵。

中学高校とテニス大会で全国制覇し、Ｕ１７とかでも活躍し、高校卒業を経て彼は遂にテニス界のプロ入りを果たす。

だが、世界王者との戦いの最中、武蔵は力尽きて死んでしまい『異世界転生』を企む女神の元へ。

「あなたいったい何なのよ!?」

「ごく普通の一般人だが？」

「ごく普通の一般人が――――――テニスで死ぬわけないでしょ!?」
武蔵を転生させる女神様は、彼に魔王討伐を依頼する。
そしてその為にチート特典を付けようとするが、
「光速で移動？　雷を操る？　未来視？　コピー能力？　いらねーよ、んなもん。つーか、そんなもんがチート特典に入んのかよ。それくらいの使い手、全国にはゴロゴロいるぜ‼」
魔法やチートを越えた力――――――『テニス』。
竜を一撃で葬り、魔の軍勢を殲滅し、騎士団の精鋭を容易く撃破する。
魔王も勇者も、テニスプレイヤーには敵わない。
今、超次元ファンタジーテニスバトルの幕が上がった‼

目次

第1話　テニスプレイヤーが死んで転生を！　――――――――――――　1
第2話　この世界で力の確認を！　――――――――――――　16
第3話　この冒険者登録を！　――――――――――――　20
第4話　この異世界で生きるために取りあえず仕事を！　――――――――――――　27

第1話　テニスプレイヤーが死んで転生を！

まず、結論から言おう。

どうやら、俺は死んだらしい。

「ようこそ死後の世界へ。私の名はアクア、あなたに新たな道を案内する女神。鏡見武蔵さん、あなたは本日午後１９時４８分に亡くなりました。辛いでしょうが、あなたの約１８年の人生は終わったのです」

目が覚めると、そこは洋館の事務室みたいな部屋の中だった。

そこで、唐突に俺は突っ立っている。

そして目の前には、事務椅子に座った一人の女神。

何故女神だと相手の言う事をすんなり信じたのかと言えば、無駄にキラキラと後光の様なものが射していたのと、現実にはありえない位の美少女だったからだ。

オマケに青髪だ。

こんな奴がリアルに居る訳がない！

ああ、本物の女神様なんだなと思ってしまった。

そして同時に、この女神様は凄まじく残念な臭いがした。

絶対頭に駄が付く類いの女神だろう。
ま、そんな女神でも、彼女の言葉を聞き、改めて自分が死んだ事を自覚した。
死んだと言われて落ち着いているのは、死ぬ直前の記憶があるからだ。
それは、俺にとってはついさっきの出来事。
激闘だった。
あの世界Ｎｏ．１の強敵を相手に戦い、そして・・・・・・死んだのだろう。
決着がどうなったのかまでは分からないが、こうやって俺が死んだという事は、俺は・・・・・・負けたのだろうな。
相手の攻撃に迎撃に出た所までは覚えていた。
「・・・・・・一つ聞いても？」
俺の質問に、女神がゆっくりうなずいた。
「どうぞ？」
「俺は・・・・・・負けたのか？」
大切な事だった。
戦って勝つ事も出来ずに、負けて死ぬ。
ああ、それはなんて屈辱的な事だろうか。
リベンジする機会がもう無いとか、無念すぎる。

「いえ、負けてませんよ。勝ってもいませんけど」
「???・・・・・・それはどういう意味だ？」
「えー、というかですね・・・・・・」
今まで荘厳的な雰囲気を纏っていた女神は、カッと目を開く。
「あなたいったい何なのよ!?」
「え？」
いや、何なのよって言われても・・・・・・。
「ごく普通の一般人だが？」
「ごく普通の一般人が――――――――――――テニスで死ぬわけないでしょ!?」
そうだ、俺はテニスで死んだのだ。
テニスというのは一々語るまでも無いだろう。
あのラケットを持って、ボールを打つ球技だ。
「いったい何が問題なんだ？」
「何がってねぇ・・・・・・ッ」
ワナワナと震える女神。
「何でテニスボールを打って人が吹っ飛んだりするのよぉっ‼　分かる!?　あなた勝ったとか負けたとかじゃないの‼　大地にクレーターが出来る打球を打ち返して相手を

半殺しに追いやって力尽きたの‼　そりゃ結果を見たら負けかもしれないけど、結果は相手も倒れて試合続行不可能で引き分け‼　テニスでそんなことが起きたの‼　分かる!?」

「・・・・・・ソレの何処に問題が？」

「問題しかないでしょ!?」

俺の対戦相手は、世界ランキング一位の・・・世界最強のプロ選手だった。

こう見えても俺は中学や高校時代は全国クラスのテニスプレイヤーで、それはもう数々の激闘を繰り広げた物だ。

そして、高校を卒業してプロ入りをした矢先、ひょんなことから世界一のプロと試合をすることになったのだが・・・・・・

「・・・・・・あれが世界最強の洗礼ってやつか」

「そんなレベルじゃなかったわよ‼　何なの？　ボールが光ったり雷速で移動したり物理法則を無視した打球が飛んだり分身したり観客席を吹き飛ばしたり‼　テニスって何なの!?」

「テニスは何、か・・・・・・哲学だな」

「そうじゃないのよおぉぉぉーッ‼」

頭を掻きむしる女神様。

そんなに頭を掻きむしると禿げるぞ？

「はぁ・・・・・・もういいわ。どうせ地球での下界の話だし、此処では関係無いし」

気を取り直して、女神はコホンと咳払いする。

「さて・・・・・・死んだあなたには、いくつかの選択肢があります」

「選択肢？」

「それは、このまま地球に新たな命として転生するか。天国的な所でお爺ちゃんみたいな暮らしをするか。さぁ、どっち？」

なんだその身も蓋もない選択肢は。

つかお前、いくつかの選択肢って、二択しかねぇじゃねえか。

「つーか、天国的な所って何だ？　そもそも、お爺ちゃんみたいな暮らしって何だ？」

「えっと、天国ってのはね。あなた達が想像している様な素敵な所ではないし、貴方が好きな漫画とかに出てくる閻魔大王とか界王とかっていないの。死んだんだからもう食べ物は必要ないし、死んでるんだから、物は当然生まれないわ。作ろうにも材料とかないし。がっかりさせて悪いけど、天国にはね、何にもないのよ。ネットもなければテレビも漫画もゲームもない。そこに居るのは、すでに死んだ先人達のみなの。もちろん死んだんだから、エロい事だってできないし、そもそも体がないんだからできないわね。彼らと永遠に意味もなく、ひなたぼっこでもしながら世間話するぐらいしかやる事がな

いわ」
「なん、だと・・・・・・!?」
　それって、つまり・・・・・・・
「界王様の所で修行したり、尸魂界で死神になって護廷十三隊に入る事も出来ない・・・・・・だと!?」
「そこなの!?　もっと他に言う事ないの!?」
「無いよ」
「ないんかい!!」
　クソ！　死んだ後の楽しみだったのに!!
　それに近い感じの事すらないなんて!!
「というか、貴方が界王様の所で修行とか死神になれたりなんてどっちみち無理じゃない？　一般人なのに」
「そこはお前、アレだよ・・・・・・俺の超次元スポーツ技で」
「超次元って言った！　今超次元って言った!!　ごく普通の一般人の枠組みから思いっきり外れてるじゃない!!」
　それはそれ、コレはこれだ。
　無念残念そうにしている俺を見て、女神は嘆息しつつも「まぁ、いいか」と再び咳払

いで仕切り直す。

「うんうん、天国なんて退屈な所行きたくないですよね？　かといって、今更記憶を失って赤ちゃんからやり直すって言われても、あなたにとっては今までの記憶が消える以上、それってあなたって言う存在が消えちゃう様なものですよね。そこで！　ちょっといい話があるのよお兄さん！」

とてもいい笑顔な女神様。

物凄く胡散臭い。

女神は警戒する俺にニコニコしながら、

「実はね？　今、ある異世界でちょっとマズイ事になってるのよね。って言うのも、俗に言う魔王率いる魔王軍ってのがいて、その連中にまぁ、その世界の人類みたいなのが随分数を減らされちゃってピンチなのよ。で、その世界で死んだ人達って、ほら魔王軍とかモンスターに殺された訳でしょう？　なもんで、もう一度あんな死に方するのはヤダって怖がっちゃって、そこで死んだ人達は殆どが生まれ変わりをトラウマで拒否しちゃうの。はっきり言って、このままじゃ赤ちゃんも生まれないしその世界滅びちゃうから、それなら他の世界で死んじゃった人達を、そこに送り込んでしまえって事になったのね」

神様目線での移民政策みたいなもんか。

「で。どうせ送るなら、若くして死んだ未練タラタラな人なんかを、肉体と記憶はそのままで送ってあげようって事になったの。それも、送ってすぐ死んじゃうんじゃあ意味が無いから、何か一つだけ。向こうの世界に好きな物を持っていける権利をあげているの。それは、強力な固有スキルだったり。とんでもない才能だったり。神器級の装備を希望した人もいたわね。・・・・・どう？　これならお互いにメリットがある話でしょう？　あなた達は、異世界とはいえ人生やり直せる。異世界の人達は即戦力になる人がやってくる。どう？　悪くないでしょ？」

なるほど、確かに悪くない話に思える。

それにコレはアレだな。

強力なチート能力もらって、俺ＴＵＥＥＥなあれか。

神様転生というやつだ。

「だからその異世界に行ってサクッと魔王を倒してきてくれない？　ゲームみたいに！」

「だが断る」

「何でよおおぉぉぉーッ‼」

「興味がなくはないんだけどな？」

「楽しい所よー？　剣とか魔法とか‼　好きなんでしょそーいうの⁉」

「確かに好きなんだが・・・・・・・」
「じゃあ良いでしょ!?」
「だって胡散臭いんだもの」
「ねぇお願い！　今月はノルマがとっても厳しいの‼」
　と言われてもなぁ・・・・・・。
「取りあえず聞きたいんだが・・・向こうの言葉ってどうなるんだ？　俺、言葉喋れんのか？」
　自慢じゃないが、英語の成績ですら赤点スレスレだ。
「その辺は問題ないわ。私達神による、アレ的な超パワー的なやつでサクッと都合よく解決済み。もちろん文字だって読めるし向こうの貨幣なんかも、日本円に脳内で換算されてくれる分かり易い便利システムを採用してるわ。だから、後は能力か装備かを選ぶだけよ」
　最初に出会った時の重々しい口調は崩壊し、完全に地が出ている女神。
　そして机の引き出しから結構分厚い本を取り出し、俺にパラパラっとページを開いて見せる。
「ほらほら、色んな特典があるでしょ？　この中からどれでも一つ選んで行けるのよー？　楽しいわよー？」

「・・・・・・もう一つ聞きたいんだけどよ」
「何々？」
「アンタ等神が、俺らみたいな奴を異世界に送り込んで、どの位の時が経って、どの位の数の死者を送り出したんだ？」
　女神アクアは俺の問いに「え？」と首を傾げながら、思い出す様に「んー」と唸りながら虚空を見上げる。
「１０人を越えてからは数えてないし、そんな昔の事は一々覚えてないわ！」
「って事は相当昔から転生者を送り込んで、尚且つ相当な人数の転生者がいる訳だな？」
「ええ、そうよ？　ちなみに、あなたの後にもまだ結構死んでる人がいるから、その人たちも送るつもりよ」
「・・・・・・もう一つ聞くけどよ」
「何？」
「現状、その魔王討伐ってどのくらい解決してんだ？」
　そんなに昔から魔王を倒すとかなんとかで、相当な数のチート持ち転生者を送り込んでるんだ。
　魔王を倒せてはいないまでも、相当数の敵軍を倒してると思うんだが、俺は如何にも嫌な予感がした。

案の定、アクアは目を逸らしやがった。
「・・・・・実はまだ幹部もロクに倒せてなかったりして」
「やっぱ俺いいわ異世界生活とか。かと言って天国もなんかアレだから、もう記憶消しても良いから赤ちゃんからスタートさせてくれ。全てをやり直すわ」
「ちょっと待って‼　お願いだからちょっと待って!?」
踵を返す俺にアクアが縋り付く。
「えぇい鬱陶しい、離せ‼」
「いーや、離さない‼　離したらノルマが熟せないのよ‼　今月とっても厳しいのよ‼」
「知るか！　つか、ノルマって何だよ!?　んな何人もチート持ち送り込んどいて何も進展してねぇとかクソゲー通り越して無理ゲーだろうがッ‼」
「おーねーがーいーッ‼　私を助けると思って‼」
「イ・ヤ・だ・ねッ‼　んな世界でチート持ってったって如何にもならねぇんなら行く価値なんざねぇよッ‼」
「分かった！　特典を２つ・・・いや、３つまでなら持って行っていいから‼」
「・・・・・・３つ？」
それはかなり破格な条件に聞こえるが・・・・・・。
「んなことやって大丈夫なのか？」

「大丈夫！　一般人の3倍の強さの転生者を送った事にしとけばなんとかなるわッ!!」
　んな理屈でイケんのかよ。
「それなら他の転生者にも複数の特典を与えりゃいいのに・・・・・・」
「それが簡単に出来ないから、1つしか選べないのよ。上が五月蠅いの」
　どこも上司とか先輩とか、目上の存在は口うるさいものらしい。
「まぁ、3つも選べるんなら大丈夫か」
　ちょっと不安はあるけどな。
　俺が行く気になったのを感じたのか、アクアが目に見えて喜色を表す。
「行ってくれるのね!?」
「ま、そこまで言うんなら・・・・・・」
　興味はあった訳だし、どっちかっていうなら記憶を無くしたくはないしな。
　俺はアクアから、持っていける特典が書かれたカタログを受け取り目を通す。
　カタログには能力系とか装備系とかステータス弄れる系だとか色々書かれていた。
「んー・・・・・・」
　なんかどれもしっくりこないな。
「なぁ、アクア。転生特典って此処に書いてあるやつしか出来ねぇの？」
　俺は、暇そうに回転椅子に座ってクルクル回っていたアクアに説明を求めた。

「え？　まぁ、出来ないって事は無いけど・・・・・・あんまり複雑なのは無理よ」
「例えば？」
「無限に願いを叶えられるドラゴンボールとかは無理ね！」
　それは色々チートが過ぎるな。
「じゃあよ、ちょっと聞きたいんだが――――――」
　俺は自分が望む特典を口にする。
「――――・・・って、出来るか？」
「いや、まぁ、それくらい出来るけど・・・・・・え、本当にそんなので良いの？」
　アクアが信じられないモノを視るように俺を視た。
　何をそんなに驚く事があるというのか。
「寧ろ俺の能力を考えたら妥当だろ？」
「そうかもしれないけど・・・・・けど、こんなのを特典に選んだ奴って今までいないわよ!?」
「何事も初体験ってあるよな」
　信じられなくても特に問題はない様で、アクアはちょっと戸惑い気に俺に特典を付ける。
「特典は『破壊不能属性を付加したテニスラケット』『色々アビリティが付いてるテニス

衣装一式』『無限にテニスボールを生み出す力・・・・・・・【無限の庭球製(アンリミテッド・テニスボール・ワークス)】』の3つで良いのね？」
「おう」
「・・・・・・本当にコレで良いのね？」
「諄いな。だから良いっつってんだろ」
「本当に大丈夫なのかしら・・・・・・」
なんかアクアの眼が死んでる。
「それじゃ、この魔法陣の中央から出ない様に」
「おう」
言われた通りに、俺は魔法陣が描かれた床の中央に立つ。
そして、魔法陣が輝き出した。
「ではでは、ゴホン。・・・・・・さぁ、勇者よ。魔王を討ち倒す為旅立つのです。・・・・・・ていうか、特典3つも付けたんだから、魔王倒してよね！」
「女神らしさが微塵も無くなったな」
今更だろうが。
「ま、それなりに上手くやるさ」
そして俺は、白い光に包まれた。

「光速で移動？　雷を操る？　未来視？　コピー能力？　いらねーよ、んなもん。つーか、そんなもんがチート特典に入んのかよ。それくらいの使い手、全国にはゴロゴロいるぜ‼」

魔王だろうがチート持ち転生者だろうが関係ねぇ！

俺に立ち塞がるやつは全部ぶっ潰す‼

・

第2話　この世界で力の確認を！

「トンネルを抜けた先には、異世界が広がっていた・・・・・・・！」
なんて台詞を、目の前に広がる光景に、興奮で震えながらも呟いた。
それは、これはテンプレートですからと言わんばかりの中世風の街並み。
異世界とは中世ヨーロッパ風であるべきだと宇宙の法則かマニュアル本かなんかがあるのかと問いたくなるほどに、此処は間違いなく異世界だ。
「・・・・・・・おぉう」
キョロキョロと街中を見渡して、行き交う人々を観察した。
「獣耳・・・獣人ってやつか？　エルフもいる。・・・・・・マジでファンタジー世界かよ！」
ホントに来るとは・・・・・・いや、確かにそういう説明だったけど、正直半信半疑だったっていうか・・・・・・。
「ま、本当なら別にいいか」
さて、魔王倒せっつーけど、いきなり魔王んとこ乗り込んで倒せるなら誰も苦労してないよなぁ。

まず何をすればいいのか・・・・・・？

「・・・・・・こういう時の定番としては、冒険者ギルドか？　冒険者ギルドに行って登録とかすれば、身分証とか作って貰ったり金貸して貰ったりして、その日の宿代稼げるような簡単な採取任務とか紹介して貰えるってのが定番だ」

問題は何処に冒険者ギルドがあるのかだが・・・・・・。

「その辺の人に聞くか」

てか、それしかねぇ。

俺この世界の地理とか知らんし。

「すいませーん、ちょっといいですか？　ギルド的なもの探してるんですが・・・・・・」

通りすがりの買い物帰りっぽいおばちゃんに尋ねる事にした。

「ギルドを？　あら、この街のギルドを知らないなんて他所から来た人かしら？　ここの通りをまっすぐ行って右に曲がれば、看板が見えてくるわよ」

おばちゃんの言葉に、やはりギルド的な物があったかと安堵する。

無かったらどうしようかと思ったぜ。

「いやぁ、ちょっと遠くから出稼ぎに来て、まだこの街に慣れてなくてね」

「あらあら、大変ねぇ・・・・・・あ、これ良かったらどう？」

と、おばちゃんは買い物袋からリンゴを一つ取り出して手渡してきた。

「おや、いいんですか？」
「構わないよ、安売りしてたから沢山買いすぎちゃってねぇ」
「ありがとうございます」
「いいのいいの。お兄さん中々のイケメンだしねぇ」
豪快に笑いながら、おばちゃんは去って行った。
リンゴを齧る。
うめぇ・・・間違いなくリンゴだ。
リンゴに似たナニカって事は無かった。
しかし・・・ふむ、俺がイケメンか。
あまり言われたことないな。
俺の周りでイケメンっつーと、俺様の美技に酔う王様とか、まだまだな王子様が差されることが多かったが。
「もしかして俺、異世界だとイケメン？」
何となく気になったので、近くにある建物の窓ガラスを鏡代わりに見てみる。
俺の恰好は、死んだときのままらしい。
赤黒白が目立つ、ＪＡＰＡＮと描かれた日本代表選手が着るテニスウェアとジャージ上下。

ラケットとかが入っているテニスバッグ。
そしてテニスシューズ。
熱い日差しを遮る為の帽子と、グラスと・・・・・・・。
うん、特におかしな所は無い。
俺の顔だって、死ぬ前と何ら変わらないしな。
「っと、んなことよりギルドだギルド」
此処からどれくらいかかるんだ？
「１０分・・・・・それが、此処からギルドまで辿り着く時間だ」
俺が煌めくオーラを纏うと、そんな考えが浮かんできた。
『才気煥発の極み』。
どうやら力はこの世界でも問題無く使えるらしい。
さて、そんじゃ冒険者ギルドに行くとしようか！
・

第3話　この冒険者登録を！

おばちゃんに教えられた道を行き、その先で見つけた冒険者ギルドっぽい施設に入っていく。

『冒険者ギルド』

つまり、異世界のハロワ的なアレだ。

色々な仕事を受けられる職業斡旋所だからね。

登録すれば、駆け出しの冒険者が生活出来る様に色々チュートリアルしてくれるのが、異世界冒険者ギルドだ。

金を貸してくれるか、駆け出しでも食っていける簡単な仕事を紹介してくれて、オススメの宿も教えてくれるはず。

「今日の所は登録と金の確保、そして泊まる所の確保だな」

取りあえず真っ直ぐカウンターへと向かう。

受付は四人。

この時間は受付の利用客が少ないのか、誰も並んでいない。

俺は一番手前にいる女性職員の所へ歩を進める。

ちなみにどうでもいい事だが、一番美人さんですこの職員。
「今日はどうされましたか？」
受付の女の人はおっとりした感じの美人だ。
ウェーブのかかった髪と巨乳が、大人の女性の雰囲気をかもし出していた。
「冒険者になりたいんですが、田舎から来たばかりで何も分からなくて・・・・・・」
田舎から来たとか遠い外国から来たとか言っておけば、受付が勝手に色々教えてくれる。
「そうですか。えっと、では登録手数料が掛かりますが大丈夫ですか？」
後は受付の人の言う事に従っていけば・・・・・・・て。
登録手数料？
「金いるんすか？　登録すんのに？」
「はい。１０００エリス程なんですが・・・・・・」
１０００エリスってなんだよ、知らねーよそんな単位。
「ちなみにコレでイケたりしません？」
「えーっと、コレは・・・・・・？」
「故郷の金だ」
「さすがにちょっと・・・・・・」

財布に入ってた１０００円札を出してみたが、やっぱりダメらしい。
うーん、どうすっかなぁ・・・・・。
「金借りたりとかって出来ないんっすか？　クエスト熟して返済とか」
「可能ですよ」
出来るんかい。
「じゃあそれで」
１エリス１円と考えれば、１０００エリスは１０００円相当だ。
還すのはたぶん難しくないだろう。
「では、登録についてご説明します。冒険者とは、街の外に生息するモンスターを討伐する人の事ですが、それ以外の仕事もこなす何でも屋みたいなものです。冒険者とはいわゆる総称で、技術・技能を活かした各職業というものがございます。そこでまずは、こちらの冒険者カードに触れてください。それであなたのレベル、ステータスが表示され、適した職業が選ぶことが出来、モンスターを倒す事で得られる経験値を貯めるとレベルアップし、スキルを覚えるポイントも加算されていきます」
「ステータス？」
「はい。このような感じに」
言って、受付のお姉さんが自分のカードらしきものに触れてみる。

するとカードに何か色々文字が浮かんでくる。
筋力とか魔力とか。
職業（クラス）がギルドの受付になってるな。
「レベルって平均はどんなもんなんすか？」
「此処、かけだし冒険者の町アクセルだと、レベル１～２０程が大体ですね。実力者なら５０以上あったりしますが」
お姉さんはあくまで受付だから、レベルは高くない。
コレがステータスか。
クラスか・・・俺は何になるんだろうか？
やっぱ剣士とか魔法使いか？
俺は内心緊張しながら、淡い期待を込めてカードに触れた。
そしてカードにステータスが表示される。
『ステータス』
名前：鏡見　武蔵
性別：男
年齢：１８歳
職業：テニスプレイヤー（オールラウンダー）

レベル：９５
パワー：Ｓ（細身の見た目から想像される打球と異なり、かなりヘビーなショットを打つ。筋力は相当高い）
スピード：Ｓ（とにかく規格外の脚力を持つ。常人離れした動体視力と反射神経も兼ね備える）
スタミナ：ＳＳ（細身で長身ながら体脂肪が殆ど無く全身しなやかな筋肉のバネの様。アスリートとして完成された肉体）
メンタル：ＳＳ（常に自信に溢れ余裕の表情。物事にまるで動じない精神力は、全国や世界と戦い続けた経験故）
テクニック：ＳＳ（恐ろしいまでに正確で対戦相手に絶望を与えるテクニック。プロが使う高度な技を瞬時に身に付ける）
「何で!?」
俺と受付のお姉さんが、共に驚愕の叫びを上げる。
そりゃそうだ。
何で俺のステータスの項目が違ってる上に、五角形のグラフになってんだよ!?
「あの、お姉さん？　どうなってんだコレ？」
「こ、これは・・・・・・どういう事なんでしょう？」

ギルド職員も困り顔だ。

「ゴメンなさい。ギルドのカードシステムは、カードに組み込まれた術式が自動で対象を査定するようになっていて、私達職員も詳しい仕組みは把握してないんです。何人もの冒険者のステータスを見てきましたが・・・・・こんな不思議なステータスは私も初めてみました」

ギルド職員すら見たことのないものが、俺が何でこうなっているかなんぞ知るはずもないな。

「それに職業（クラス）もです。基本的にステータスの項目によって選べる職業が幾つかあるんですが、何故か基本職である冒険者も選べません。このカードに書かれてある『テニスプレイヤー』にしか就けないようです。けど、テニスプレイヤーなんてクラス、初めて見ました。こんな職業が存在していたなんて・・・・・・！」

「フ・・・つまり俺は、この世界のシステムを捻じ曲げるほどに、骨の髄までテニスプレイヤーって事だな」

思わず髪をファサ・・・と掻き上げて決めてしまう。

良いだろう。

何処でだってテニスしてやるぜ‼

「そ、それにレベルも９５・・・・・あ、あの、本当にかけだしの冒険者なんですか？」

・お姉さんの困惑も尤もだと思うが、俺だって訳判んねぇよ。

第４話　この異世界で生きるために取りあえず仕事を！

そして俺の冒険者生活が始まった。

金をギルドから借りて加入し、最初のこのクエストをクリアし、その報酬から登録料を引いて、残りが俺の収入ということになる。

森の奥へとやって来た俺の記念すべき最初のクエストは・・・・・・ゴブリン退治だ。

その数・・・・・・およそ１００匹。

ゴブリンなんて初心者用の雑魚モンスターだろうと思っていたのだが、アクセル周辺ではもう弱いモンスターは狩り尽されているらしく、残っているのは強いモンスターか、そこそこ強いモンスターか、厄介なモンスターや面倒なモンスターばかりのようで、俺が今回受けたこのクエストは、面倒なモンスターに分類される。

いくら雑魚とは、流石に１００匹は数が多いからだ。

だが、俺の力がこの世界にどの程度通用するのかを確かめるには丁度いい。

それ故、９５レベルもあるからかスキルポイントとやらが膨大な数値をステータスカードに記されていたが、まだ１ポイントも使っていない。

今は、素の実力を測りたいのだ。

「んじゃ、さっそく――――――」

俺は神の恩恵ともいうべき転生特典・・・【無限の庭球製（アンリミテッド・テニスボール・ワークス）】で、ラケットを持つ左手とは反対側の右手の掌に魔力を集中させる。

すると、1個のテニスボールが生成された。

それをトスで高く上げ、

「――――――一球入魂ってな！」

俺の時速３００㎞で放たれたフラットサーブが閃光の様に宙を走り、1体のゴブリンの頭部を直撃。

ゴブリンの首から異音が響き、胴体がバネ仕掛けの様に跳ね上がり、首がおかしな方向に捻じ曲がる。

地に伏したゴブリンは、それ以降起き上がる事は無かった。

まず1体。

一瞬の静寂。

ゴブリンたちの間に沈黙が流れ、風が木々を撫でる音しか聞こえてこない。

そして同族が1匹突然死んだことにより困惑し始めるゴブリンたちに、俺は更に追撃を始める。

「ふむ、特に腕に問題はねぇな。ならどんどんいくぜ！」

再び魔力でテニスボールを生成し、再びトスを上げる。
「いくぜ！　ツイストサーブ!!」
スライスサーブとは逆回転のスピンがかかったサーブは、強烈な角度と球威を以って跳ね上がり、ゴブリンの顎を砕く。
２体目。
跳ね上がったボールは宙を舞い、俺は高く跳躍し、次の標的へと狙いを定める。
「ダンクスマッシュ!!」
放ったスマッシュはゴブリンの頭部を砕き、バウンドしたボールはその横にいた別のゴブリンを襲う。
３体、４体目。
再び宙へ舞うボールを、俺は両手のバックハンドで撃つ。
「ジャックナイフ!!」
ギリギリまでチャージし放った打球は鉄の如き球威を誇り、ゴブリンの胴体を抉る。
５体目。
「まだまだいくぜぇ!!」
更にボールを３つ生成し、俺は腕を大きく振るう。
「スネイク!!」

一度に３つのボールを打ち、ボールは其々蛇の様に弧を描き宙を飛ぶ。
一つのボールはゴブリンの足を救い転ばせて、残りの二つは地面に落ちた先程放った２つのテニスボールに当たり、ボールは再び宙を舞った。
「更に！」
俺はテニスボールを５つ生成。
一度に五球打ち、宙を舞うテニスボール５つを打ちバウンドさせ自分の手元に寄せる。
そのボール、合計１０個。
だが、何の問題も無い。
１０球打ちくらい寝ながらでも出来るぜ‼
「１０８式波動球ッ‼」
強烈なパワーボールがゴブリンを纏めて１０体吹き飛ばす。
これで１５体。
「レーザービームッ‼」
一条の閃光がゴブリンに次々バウンドし、計１０体を撃破。
２５体。
「ツイストスピンショットッ‼」

ツイスト回転の打球がゴブリンを5体ぶちのめす。
３０体。
「ネオスカッドサーブッ!!」
剛速球のサーブが更に１０体のゴブリンを吹き飛ばし、
「プロネーションサーブ!!」
サーブで更にもう１０体。
「ディープインパルス!!」
凄まじいフォアハンドストロークで１０体ふっ飛ばし、合計６０体。
「侵略すること火の如く!!」
怒涛の攻めで更に１０体。
「ビックバンサーブ!!」
逃げようとするゴブリンを更に１０体ふっ飛ばし、
「超（スーパー）ウルトラグレートデリシャス大車輪山嵐ッ!!」
後はもう狼狽えるだけのゴブリンを２０体薙ぎ払い、
「コレでラストォッ!!　氷の皇帝（エンペラー）ッ!!」
残りの全てを纏めて撃破。
辺りは死屍累々。

計１０球のテニスボールによって仕留められた、１００体越えのゴブリンの死体の山が出来上がった。

「調子も上々。この世界でもやっていけそうだぜ」

今まで戦ってきた戦士（テニスプレイヤー）達の技だ。

しかし、ゴブリン程度では肩慣らしにもならないようだ。

もうちょい、この世界で俺がどの程度通用するのか、その限界点近くくらいは試したかったんだがなぁ。

「まだまだだぜ、この世界」

俺を楽しませてくれる強い奴は、この世界にいるのかねぇ。

魔王くらいか？

・